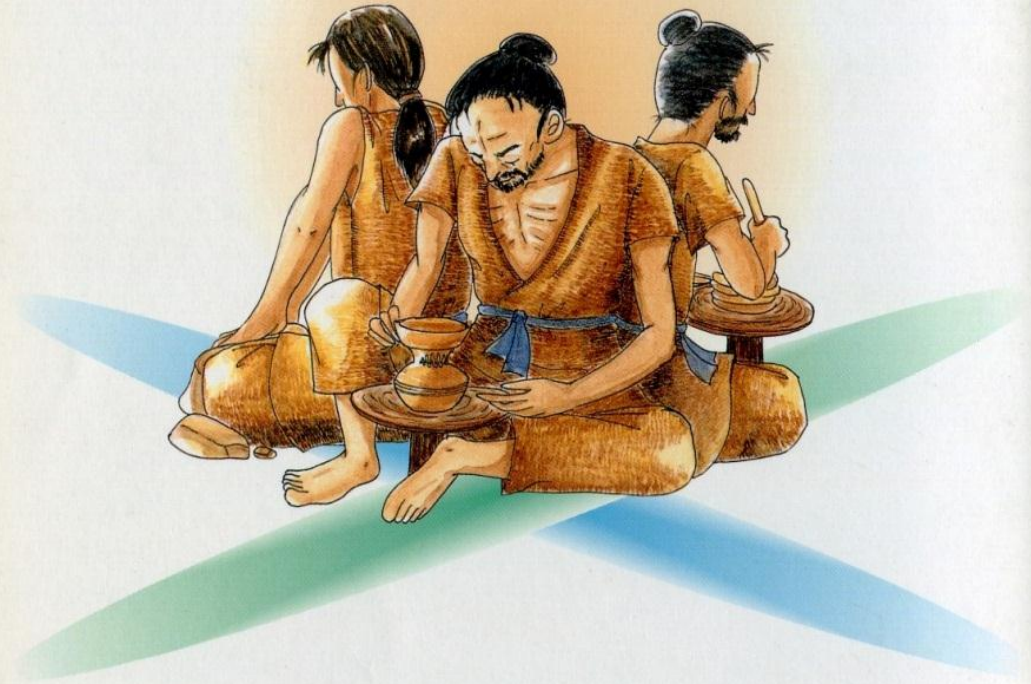


発行 豊中市教育委員会
1997年3月31日発行
編集 社会教育課文化財保護係
印刷 図書印刷株式会社
写真提供 (財)大阪府文化財調査研究センター



とよなか文化財ブックレットNo.6 通史編VI



技の旅びと

— 渡来人が変える 古墳時代のくらしと技術 —

けんた

いや〜、古墳はおもしろかったね。こうかな副葬品とかいっぱいあって。

やよい

そうね。古墳をつくったりするのは、たいへんな技術がひつようね。

けんた

その技術はどこから、手に入れたのかな。

やよい

日本のふる〜い本には、中国や朝鮮からいろいろな人が日本に新しい知識や技術を伝えたことが書いてあるわ。

けんた

じゃあ、古墳時代には、たくさんの人が海をわたって日本にきたんだね。

渡来人の舟？（堺市出土・1600年前）
写真提供 （財）大阪府文化財調査研究センター



三魏



1650年前ころの東アジア

渡来人、海を渡る

やよい

そうよ。そういつひとたちを渡来人ってよんでるわ。

けんた

じゃあ、とよなかにも渡来人は住んでいたのかな？

やよい

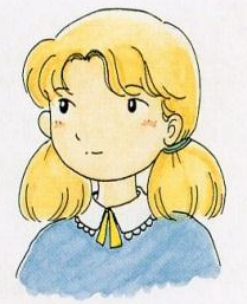
おそらくね。かれらは、むかしからとよなかにすむ人びとにいろんな知識を伝えて、なかよくくらしていたと思うわ。

けんた

どんなものを日本に伝えたんだい？

やよい

心が、ちよつとまって。答えはこの本をよんでいけば、きっとわかるはずよ。



海をこえた土器

この土器は、本町遺跡（本町1丁目）から出土した土器で、その特徴から、朝鮮からもってこられた土器だとされている。とよなかに渡来人がやって来た証拠の一つだ。（1500年前）

高さ19cm

東アジアの国々

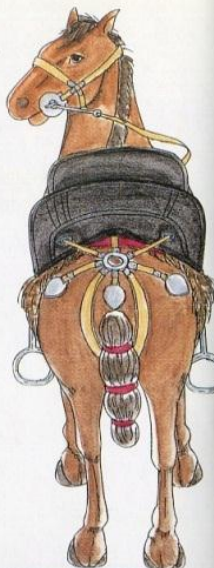
日本の古墳時代にあたる約1700年前から1350年前、中国や朝鮮半島では、それぞれが数カ国に分かれてさかんに戦いをしていた。そうした争いを避けるため、中国や朝鮮半島から日本にやってきた者がいた。また、朝鮮半島の国々の王の中には、ヤマト政権と友好関係を結んで自分の立場を有利にしようとする者もいたらしく、ヤマト政権が望む技術者を日本におくったという記録もある。国名の読み方・・・宋（そう）、北魏（ほくぎ）、高句麗（こうくり）、百濟（くだら）、伽耶（かや）、新羅（しらぎ）、倭（わ）

高さ9.5cm



馬形埴輪の一部

馬のお腹の横の部分。人が足をかける輪（鐙）がみられる。（穂積1号墳・服部寿町1丁目・1500年前）



土で作った馬

（本町遺跡・本町3丁目・1500年前）



馬の鞍（くら）と飾り

（御獅子塚古墳・南桜塚2丁目・1550年前）



日本にはもともと馬は住んでおらず、古墳時代より前には馬はいなかったと言われている。古い中国の本である『魏志倭人伝』にも、「(弥生時代の)日本には馬はいない」と書かれている。馬が日本に入ってきたのは古墳時代の中ごろになってからだ。上の馬の鞍と飾りは、日本で最も古いもののひとつだ。これと似たような鞍が朝鮮半島の南部からみつかり、この鞍や飾りも朝鮮半島で作られたか、日本にやってきた渡来人が作ったものだと考えられる。馬を飼いなすことはとてもむずかしいので、馬を育てる方法も馬そのものも、渡来人が日本にもってきたと考えられている。



競馬の馬



けんた君の身長：155cm



古代の馬

馬の姿、今と昔

テレビで見る競馬の馬は、近代になって日本に輸入されたもので、古代の馬とは姿も形もまったくちがう。古代の馬は背も低くずんぐりした体形で、モウコウマと呼ばれる馬に近い種だった。

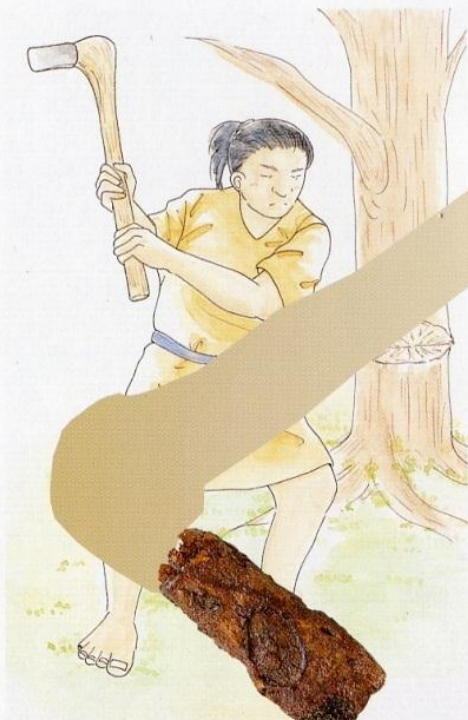
馬がきた

時代をささえるニューアイテム 鉄で作る

長さ13cm



ナイフ (大塚古墳・約1600年前)



長さ8cm

けんた
やよい
けんた
けんた
やよい

原料の鉄はどうやって手にいれたのかな。
ほとんど朝鮮半島から輸入していたんじゃないかな。
日本で鉄を作りはじめていたという人もいるけど。
ふくん。輸入までするなんて、鉄で作った道具はやっぱりべんりなのかな。
そりゃそうよ。けんたくん、鉄のノコギリやナイフなしで石の道具だけで本箱つくれる？
めっそうもございません。

鉄は争いのもと？

日本の人が朝鮮半島の鉄を取りにいったことが中国の古い本には書かれている。技術と資源のない日本では鉄を手に入れることはたいへん重要なことだった。べんりな鉄を手に入れるため、日本の豪族はたがいに争ったと考えられている。奈良時代にかかれた日本の本や朝鮮の記録には、古墳時代の日本の人が軍隊をつれて朝鮮に攻め入ったことが記されている。これも鉄を手に入れるためだったのかもしれない。ほんとうに戦争をしたかどうかはわからないが、日本と朝鮮のクニグニが鉄をめぐる往來していたことだけはまちがいなさそうだ。

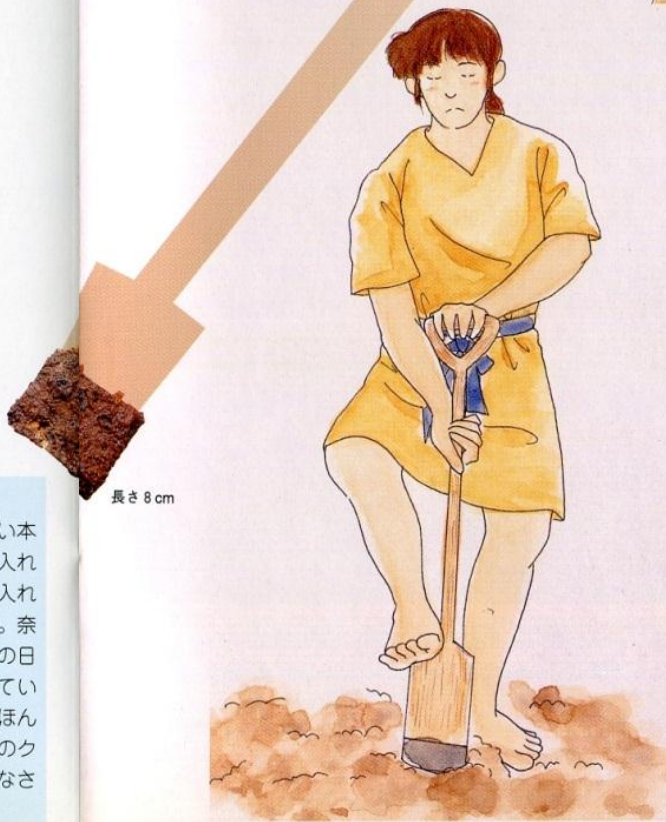
鎌 (御獅子塚古墳・1550年前)
柄 (上津島遺跡・1600年前)

刃の長さ10cm



斧 (大塚古墳・約1600年前)

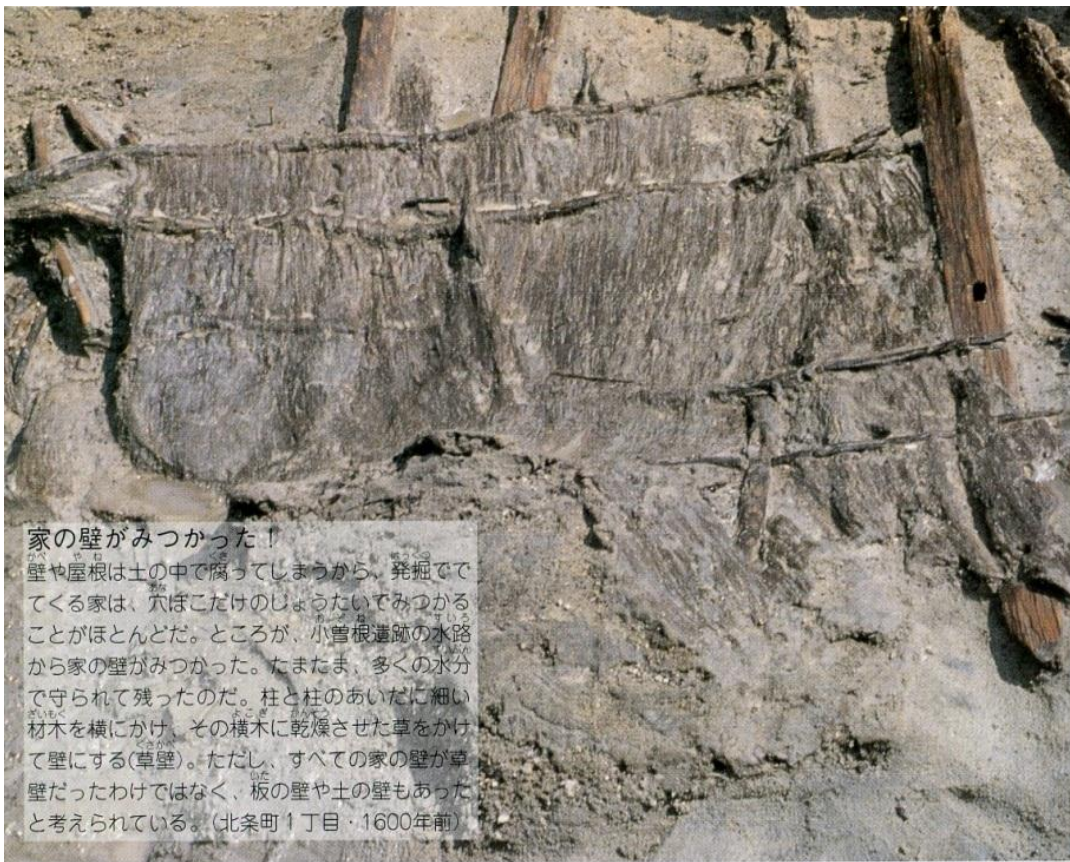
鋤 (大塚古墳・約1600年前)



長さ8cm

けんた
やよい
けんた
けんた
やよい

馬の鞍をみて思いたしたけど、古墳時代の武器も鉄だったね。(第V巻9ページ)
武器や鞍だけじゃないわ、弥生時代に石で作っていた道具は、みくんな鉄で作られるようになったの。(第III巻13ページ)
弥生時代には鉄の道具はなかったの？
いいえ。鉄は弥生時代の初めからあったみたいだけど、貴重品だったみたいで、ふだん使う道具の多くは石で作ったのね。



家の壁が見つかった！

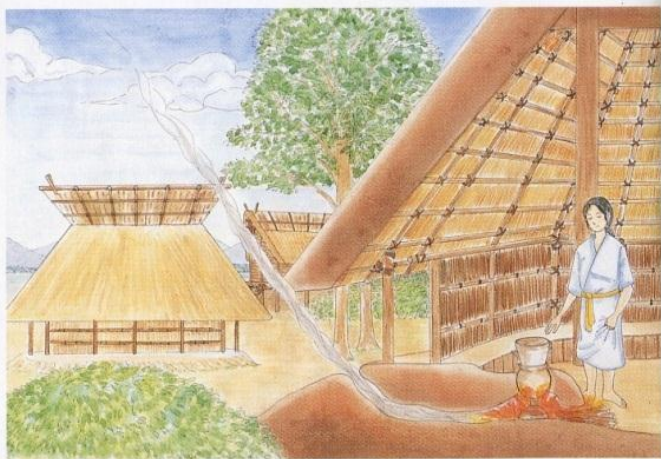
壁や屋根は土の中で腐ってしまうから、発掘ででてくる家は、穴ぼこだけのしょうたいで見つかることがほとんどだ。ところが、小曾根遺跡の水路から家の壁が見つかった。たまたま、多くの水分で守られて残ったのだ。柱と柱のあいだに細い材木を横にかけ、その横木に乾燥させた草をかけて壁にする(草壁)。ただし、すべての家の壁が草壁だったわけではなく、板の壁や土の壁もあったと考えられている。(北条町1丁目・1600年前)



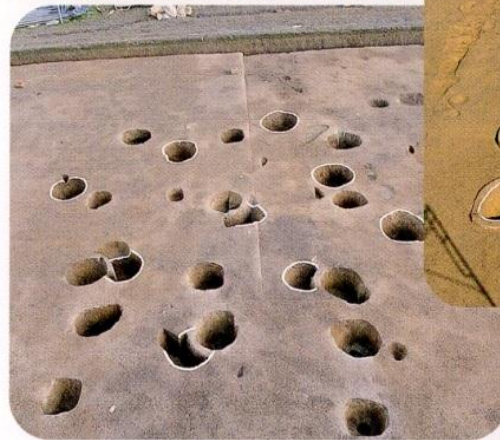
炉からカマドへ

家の形ばかりではなく、家の中も変わった。これまで料理は炉でしていたのが、カマドが使われるようになった。上の写真のように、粘土と土でカマドを家のはしに作りつけ、台の上に土器をおいて煮炊きをする。土器でカマドを作る場合もある(次のページ)。

(本町遺跡・本町3丁目・1500年前)



(内田遺跡・桜の町3丁目・1400年前)

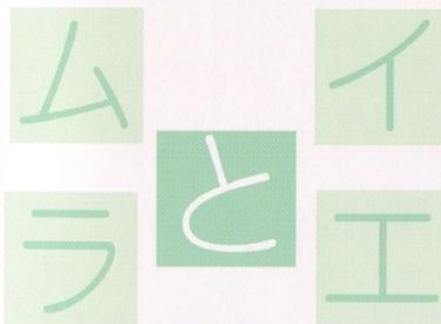


掘立柱建物の倉庫



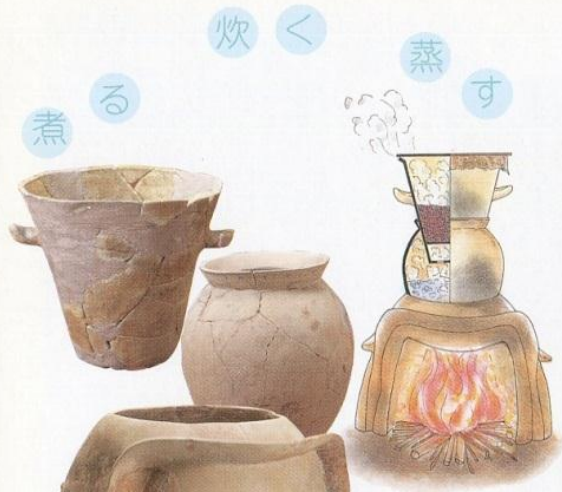
掘立柱建物の家

周囲に柱を立て、その間を壁でふさいだ家である。真ん中に柱を立てるものは高床の倉庫だと考えられる。



竪穴住居 (内田遺跡・桜の町3丁目・1400年前)
(円内はカマド)

古墳時代になると家の種類がふえてくる。住むところ・住む人の身分によって、家の大きさや形が違ったりする。第V巻15~16ページで見たように、豪族は巨大な倉庫を持っていた。豪族の住んだ家はとよなかでは、まだ見つかっていないが、おそらく堀をめぐらし、堀の内側に大きな掘立柱建物を何棟もたてていたことだろう。いっぽう、ふつうのムラ人は竪穴住居や小さな掘立柱建物に住んでいた。これだけ聞くと弥生時代と変わらないように思えるが、同じ竪穴住居でもずいぶん進歩した。形はすべて四角になる。煮炊きは炉からカマドにかわっていく。また、弥生時代の竪穴住居は屋根がちよくせつ地面までおりていて、屋根が壁の代わりにしていたが、屋根はとちゅうで止まり、新たに壁が作られる。(第III巻3~4ページのイラストとくらべてみて!) また、掘立柱建物の数ががしょじよにふえてきて、倉庫だけではなく、住居としても用いられるようになった。



甗・甕・カマド (甗の高さ25cm)

けんた やよい
けんた やよい
けんた やよい

須恵器はみるからにじょうぶそうだけど、作るの
はたいへんなんじゃないの？
そうね。いままで日本にはなかった窯を作って焼
きあげるの。
須恵器の専門家がいないとつくれないね。
そうね。弥生時代までは土器は各ムラで作って
いたけど、須恵器は特別な場所で技術を持った人が
作ったのね。
そうか。どこでも作れるわけじゃないんだ。
じつはとよなかは須恵器をたくさん作っていたの
で有名なところなのよ。



大甕 (高さ1m)

提瓶 (高さ25cm)
古代の水筒か？

小形甕 (高さ23cm)

茶色の土器 灰色の土器

つき杯 (直径15cm)

高杯 (高さ13cm)



たかつき高杯 (高さ15cm)

けんた やよい
けんた やよい
けんた やよい

ありや、灰色の土器と茶色の土器があるね。
灰色の土器を須恵器、茶色の土器を土師器とい
うのよ。弥生土器が変化してできたのが土師器。
須恵器は朝鮮半島からあたらしい技術が古墳時代
の中ごろ(約一六〇〇年前)に伝わって作られる
ようになったの。
二種類の土器は使い方がちがうの？
須恵器は硬くてキメこまやかだから、お米や水・
お酒などをたくわえておくのに使ってたの。土師
器はおもにたべものを料理するのに使ったのね。



須恵器工人の墓

永楽荘と本町にはかつて小さな古墳が10基くらいあった。これらの古墳には陶棺という陶器の棺桶が使われていた。須恵器工人のリーダーの墓だと考えられている。そのリーダーには、渡来人の一派である桜井氏が考えられている。
(太鼓塚古墳群・永楽荘・1400年前)

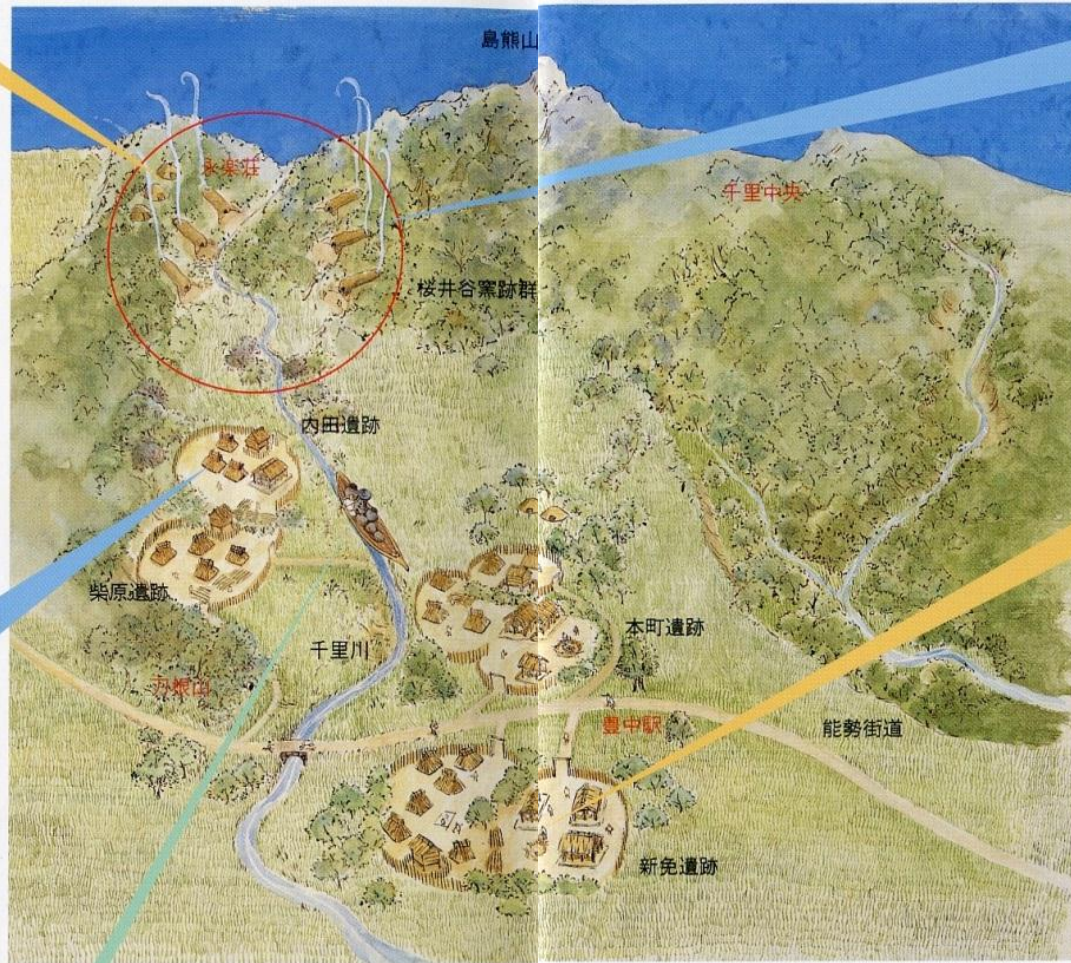


工人のムラ

須恵器を作ったひとびとのムラはハッキリとわかっていないが、内田遺跡や柴原遺跡はその候補の一つだ。
(内田遺跡・桜の町3丁目・1450年前)

須恵器を運ぶ

桜井谷で焼かれた須恵器は、おそらく千里川などの近くの川を使って、ふもとのムラ（本町遺跡・新免遺跡）まで運ばれた。



箕輪付近から島熊山方向をながめてみた図

須恵器づくりの町・とよなか 桜井谷窯跡群 と周辺の遺跡



須恵器を作る

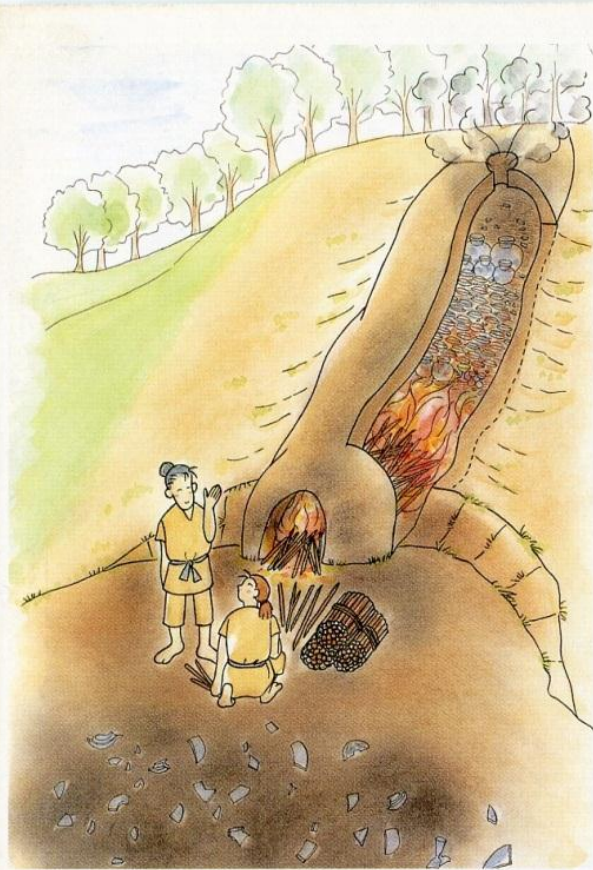
丘陵の斜面を利用して長さ10mぐらいのトンネル状の窯をつくる。こうした窯で須恵器は焼かれた（13・14ページ参照）。
(桜井谷2-18号窯・桜の町6丁目・1400年前)



須恵器の間屋

桜井谷で作られた土器は、ふもとのムラである本町遺跡・新免遺跡などにいったん集められる。ここで割れたり欠けたりした不良品をより分けて、良い土器だけが各地のムラに運ばれた。だから、本町・新免遺跡では、上の写真のように捨てられた不良品がたくさんみつかるんだ。
(新免遺跡・玉井町2丁目・1500年前)

千里の山々には、須恵器を焼く窯が50基以上も作られた。これらの窯をまとめて桜井谷窯跡群と呼んでいる。須恵器を焼く窯を作るには、いろいろな条件がそろわないとダメなのだ。須恵器の材料である粘土が近くにあること、粘土をこねる時に使う水があること、窯は斜面に作るのでてきとうな斜面も必要だ。そして、火を使うから燃料となる木も必要だ。桜井谷は窯を作るのにピッタリな環境だった。桜井谷で作られた須恵器はとよなかのムラだけでなく、周辺のムラまで運ばれて使われた。須恵器づくりは古代とよなかの産業だったのだ。須恵器づくりは古墳時代の中ごろ（1550年前）にはじまり、奈良時代（1300年前）まで続いた。



窯の中の須恵器
 窯の入り口から1~2m入ったところから窯の奥の方まで、粘土をこねて作った須恵器がならべられる。(桜井谷2-23号窯跡・永楽荘4丁目・1450年前)

けんた やよい
 これが須恵器を焼く窯かい？
 そうよ。発掘されたときは、てんじょうが落ちてなくなっていたけど、もともとはトンネルみたいになっていたの。

けんた やよい
 窯の壁が赤くなっているね。
 空気をとじこめているので熱が逃げない。窯の中は千度以上になるので、壁が焼けて赤くなったり青くなったりするのね。うわーあつそうだね。

けんた やよい
 この熱と空気をさえぎってしまふことで、かたくてじょうぶな須恵器ができるのよ。

直径15cm



ゴミ捨て場

窯から出た灰や不良品の須恵器は、窯の下の方に捨てられた。だから窯の下の斜面にはたくさんの須恵器のカケラが灰や土といっしょにうまっている。
 (桜井谷2-17号窯跡・少路2丁目・1450年前)
 (高温のためねじれた不良品の土器・桜井谷2-29号窯)

桜井谷2-29号窯・永楽荘4丁目
 全長8.5m・幅2.5m・1450年前

須恵器の窯

左：直径 3 cm



金のイヤリング

古墳時代の終わり（約1400年前）ごろ流行したイヤリング。男・女の区別なく耳に付けていた。（富貴コレクション）

高さ40cm



巫女埴輪（野畑・約1500年前）



高さ15cm

巫女埴輪（穂積1号墳・約1500年前）



ネックレスの玉

古墳時代の後期（約1500年前）以降になると、カラフルな玉を使ったネックレスが多くなる。（富貴コレクション）



長さ約5cm



高さ11cm

お祭り用の土器

（桜井谷2-29号墓・約1500年前）

左の勾玉長さ4cm



ネックレス

細長い玉（管玉）と「C」字に曲った玉（勾玉）の穴にヒモを通して、ネックレスにする。古墳時代の中ごろまでは緑の石が好まれ、ネックレスの玉に使われていた。（大塚古墳・1600年前）

かんざし

竹ヒゴを曲げて糸でしばる。糸をまいた部分に黒いウルシを塗ってつくる。大塚古墳で出土した。



高さ70cm



武人埴輪（新免3号墳・約1500年前）

ふだん、男の人は上衣を着てオビをしめ、下はゆったりとしたズボンをはき、ヒザの下あたりをヒモで結んでいた。もちろん戦争の時は「よろい」や「かぶと」を着て武装していた。髪は耳の前でたばねる。「美豆良」という髪形だ。左側は女の人を代表して、神につかえる巫女に登場してもらった。「おすい」と呼ばれる上着に、たすきとしめ縄をかけ、ハカマをはいている。巫女の中には、ハカマをはかず上着だけの人も多かったようだ。髪は頭の上でたばねる。女も男もネックレスやイヤリングをしていて、なかなかおしゃれだった。ただ、こんなにぜいたくな服やアクセサリーをもつことができるのは、豪族やその家族・ムラ長・巫女などの限られた人々だった。

ちょっと気になる

古墳時代のファッション



日がさの埴輪
有力者の日がさ（きぬがさ）をモデルにした埴輪（直径44cm）。有力者のけらいががさを持ち、有力者にさしかけた。（御獅子塚古墳）



長さ17cm



石のプレスレット
北陸の石を使って作られた。やわらかい石だが、加工は難しい。（待兼山古墳・1650年前）



鏡のデザイン
中国の鏡をまねて作った直径18cmの銅製の鏡。裏に細かいもようがいてねいにつくられている。弥生時代の鏡とくらべてみてみよう。技術の進歩があきらかだ。（大塚古墳・1600年前）



すすむ技術、かわる生活



お祭りのための勾玉？
大きな勾玉に小さな勾玉がひっついた、とくべつな勾玉（長さ7.2cm）。使い方はよくわかっていないが、お祭り用と思われる。滑石（かっしよ）というかたい石から作られている。（島田遺跡・庄内栄町・1400年前）



壺の埴輪
台の上においた壺をモデルにした埴輪（高さ73cm）。ラッパのように広がる形は、壺のクビをモデルにした。（御獅子塚古墳・1550年前）

それにしても、すごい変化が古墳時代にはあったんだね・・・
そうね。豪族（たかづか）があらわれ、古墳をつくり、ひとびとのくらしも大きくなってたわ。
外国から新しい技術が伝わり、家も土器（かわらけ）も服も変わったし、便利な道具もつくれるようになった。
だけど、豪族が富をひとりじめして、とよなかのひとびとを支配（しほ）したことも忘れてはいけないわ。
そうだね、このページにあるすばらしい工芸品（こうげいひん）も、ふつうのムラ人ではなく、豪族（たかづか）たちが使っていたものだね。
生活はたしかに便利になったけど、みんなが平等に幸せになったとはいえないわ。それにくわへ、現代（げんだい）はもっと平等で、工芸品（こうげいひん）や道具もみんなが使うことができる。平等な社会（びやうびん）がいかに大切（たいせつ）かっていうことがわかるわね。